

長野県の公営保育所における 自然資源を活用した保育実践の報告

A Report on Cases of Early Childhood Education and Care Utilizing Natural Resources in Public Nursery Schools in Nagano

多田 幸子 堤 裕 美 関 裕 子
TADA Yukiko TSUTSUMI Hiromi SEKI Yuko

要約 長野県の公営保育所の中で、信州型自然保育の普及型に認定された、6つの施設における地域の自然とかかわる遊び・活動を含む保育を視察した。視察当日は、子どもが登園してから昼食をとるまでの午前の活動・遊びを参観し、その後、常勤保育士から各施設での実践に関する談話を聞いた。結果をまとめたところ、各園は、保護者や地域住民との協力関係の中で、山林での自由遊びや田畑での栽培・収穫活動、小動物の飼育活動などを実施していた。そして、それぞれの遊び・活動の過程で、子どもだけでなく保育者にも、自然物や自然地に関わる学びが経験されていた。また、園によっては、職員の人事異動に備えて、これまでに行われてきた地域の自然とかかわる遊び・活動を引き継ぐための具体的手立てが検討されていた。

キーワード：就学前児 信州型自然保育 公営保育所 保育環境 地域資源

導入

子どもにとって、「実地」での「身体全体で対象に働きかけ、かかわっていく」体験が伴う遊びや活動は、「思考や実践の出発点あるいは基盤」、「あるいは、思考や知識を働かせ、実践して、よりよい生活を創り出していく」基盤とされる（文部科学省、2008）。とりわけ、事物に実際に触れて、かかわり合う直接体験の可能な遊びや活動はその教育的意義が強調されており、そういった直接体験の中でも、自然を対象とする体験は幼い子どもの心身の発達に総合的に寄与す

ることが期待され、就学前児への養護と教育の一形態である自然保育^{注1}の実践が広がりを見せている（茶屋，2017）。

そのような中で、「人が繰り返し自然に働きかけることによって、歴史的に形成」された「里山」型の自然が県土の約8割を占める長野県では（富樫，2015）、信州型自然保育認定制度^{注2}を設け、乳幼児の健康的な心身の発達支援に、地域の自然資源の活用を促している。信州型自然保育とは「信州の豊かな自然環境や地域資源を積極的に活用した、屋外での多様な体験活動を基軸とする保育」を指す（長野県，2015）。多田・酒井（2022）は、「一日の保育時間のうち大半を屋外で過ごすことで、たっぷりと自然体験」ができる（長野県，2015）、信州型自然保育認定制度で特化型に認定された就学前施設への視察を実施した。そして、二つの特化型施設への視察から、自然地での保育は、自然科学的知識の獲得に代表される自然物そのものに関する学びと、自発性や自律性、他者性の育ちに代表される自然物とのかかわりの過程で得られる学びの可能性を内包していることを報告した。加えて、そういった異なる種類の学びは、保育者自身がその場所に実際に足を運んで自然物や自然物に関わる人材と直接的に相互作用するなどし、自然地を、子どもにとっての活動及び遊びに適した場所となるよう意図的に整えることに支えられていると指摘した。

一方で、長野県の信州型自然保育認定制度における認定区分には、「特化型」とともに、「屋外での自然体験活動を大切にしつつも、それ以外のさまざまなプログラムにも重点」を置く「普及型」がある（長野県，2015）。2022年10月現在で、信州型自然保育認定園は270園あるが、そのうち、特化型は15園、普及型はその17倍の255園にのぼる。このことから、「街と山里と奥山が、ごく近い距離の中に凝縮」している長野県での（長野県環境保全研究所自然環境部，2015）、自然保育の現状を偏りなくとらえるとすれば、「普及型」に認定された就学前施設での実践にも目を向ける必要があるだろう。加えて、長野県は保育所等の公営の就学前施設数が413施設と全国で愛知県、東京都に次いで3番目に多い^{注3}ことをふまえると、市町村が運営する保育・幼児

表1 視察先となった信州型自然保育「普及型」認定保育所一覧

日 時	対象施設	地 区
2022年 9月12日	筑北村立筑北ひまわり保育園	中信（長野県東筑摩郡筑北村）
2022年10月17日	上田市武石保育園	東信（長野県上田市下武石）
2022年10月20日	上田市室賀保育園	東信（長野県上田市下室賀）
2022年 11月4日	伊那市立西箕輪保育園 伊那市立西箕輪南部保育園	南信（長野県伊那市西箕輪）
2022年11月10日	上田市すがだいら保育園	東信（長野県上田市菅平高原）

教育施設における自然資源の活用の実際に注目することもまた求められるといえる。

以上をふまえ、デイリープログラムの一部に自然地での遊びや活動、または自然物を用いた遊びや活動を組み込んでいる「普及型」の就学前施設の中でも、公営施設に焦点を当て、現地に赴いて日常保育を参観するとともに、各園における保育についての常勤職員の談話を聞き取ることとした。「普及型」の公立保育園への視察を通して、子どもや保育者を取り巻く自然資源の何に焦点が当てられ、また地域の自然資源を保育に活かす際の配慮の視点がどこに据えられているのかを探り、各市町村による、子どもの発達環境の保障のための取り組みの実態を把握することを目指した。

訪問した施設は、信州型自然保育認定制度において普及型に区分される6つの公立保育園であり、地区別にみると中信地区の東筑摩郡筑北村で1園、東信地区の上田市で3園、南信地区の伊那市で2園であった（表1を参照）。施設訪問は、屋外での活動や遊びが子どもにも保育者にも身体的な負担なく行いやすく、園行事などの支障にならない秋季の9-11月に、感染症拡大防止に必要な事前対策をしたうえで実施した。いずれの施設でも、在園児の登園から昼食までの午前中の保育を参観し、その後に常勤保育者から、午前中の保育内容の解説込みで、園の保育に関する談話を聞ききとった。

報 告

以下では、地区別に、中信地区、東信地区、南信地区の順で各園での視察結果を報告した。まず、各園のある市・村の保育・幼児教育の概要にふれ、次いで、各園における、園舎周囲の環境、参観時の保育の流れ、そして、地域の自然資源を活かした保育の実態についてまとめた。園ごとの報告で、保育者の談話中での表現をそのまま用いる際には、カギカッコ付きの斜体で表した。

中信地区

筑北村における保育・幼児教育

筑北村では、平成29（2017）年告示の保育所保育指針、幼稚園教育要領を受けて設置された幼児期教育・保育促進検討委員会において「生涯にわたる人格形成の基礎を培うとともに、『学びの入り口』としても重要な乳幼児期の教育・保育について、就学期への連続性・一貫性という視点」をふまえた「具体的な基本指針等を作成」した（筑北村教育委員会, 2022）。村が「一丸となって、乳幼児期の教育・保育を推進することができ、その後の学童期・青年期の伸びやかな発達・成長につながる礎を築くこと」を目指している（筑北村教育委員会, 2022）。村内には、公営の就学前の保育施設として、筑北村立筑北ひまわり保育園（以下筑北ひまわり保育園）を含め、2つの保育所がある。

筑北ひまわり保育園

1 園舎周囲の環境

筑北ひまわり保育園は、園舎の北側には山、東側には田畑が広がっている。日常的に子どもと保育者は散歩やトレッキング、園所有の田んぼでの田植えや泥遊び、また生物とのかかわりを経験している。園庭は平地部分と傾斜地部分のそれぞれで構成され、意図的に下草や落ち葉を取り去らず、庭木の一部は剪定せずに育てるなどしている（図1を参照）。



図1 筑北ひまわり保育園の園庭の一面

2 参観時の保育の流れ

視察当日は恒例行事である稲刈りが主活動として実施されており、同筑北村内の筑北村立坂井保育園と合同で年長児・年中児を中心に年少児の一部も参加した。視察時間帯の保育の流れは図2にまとめた。

8:30- 子どもたちの登園
9:40- 近隣の田圃へ移動、稲刈り



10:45- 帰園・着替えおよび水浴び
12:15- 昼食

図2 視察時間帯の保育の流れ

3 地域の自然資源を活用した保育の実践

1) 子どもと自然資源 園を取り巻く里山的環境を構成する自然物とのかかわりは、日常場面と行事場面のいずれでも認められる。動物全般に興味のある子どもが多く、特に「虫が好き」

な子どもが多い。年長児について言えば、年中時から特に昆虫に興味を持ち、害虫として駆除される予定であった蛾の幼虫である毛虫に関心を寄せ、「愛着」を感じ、クラスで越冬・羽化させることに挑戦した。この時の経験から得た「虫」に関する知識を、年長児は年下の子どもたちに教え、年下の子どもはそのような年長児の姿を見て「すごい」と思い、分からないことがあると「先輩に尋ねて、教えてもらったことはよく覚えてる」。また、植物には、「散歩」時に繰り返し目にし、実際に手に取ってみるなどする中で、「どんなところに、どうやって生えてるか」に興味を持つに至っている。視察時に行われた稲刈りでは、年長児は、あらかじめ、園外活動の途中で目にした近隣の田に見られる月ごとの変化について調べたうえで参加した。また、行事後の昼食時間には、数名の子どもが脱穀・精米の過程に興味を示したことをきっかけに、保育者による穀物図鑑の読み語りが行われた。

2) 保育者と自然資源 保育者は、自然物や自然地の保育的な意味を簡潔に語るのには「難しい」としているが、実際の、自然とのかかわる保育の事例には、保育者の自然物や自然地に対する考

え方や態度が現れているとも考えている。まず、保育者は子どもの生物への興味・関心の起こりをとらえ、そこに寄り添って、まずは子どもとともにその対象に接近することを試みている。先述の、年長児における毛虫の飼育事例では、保育者が毛虫に「苦手意識」を持っていたが、子どもとともに専門書を読んだり、実際に毛虫に給餌したりすることで、苦手を感じつつも、「愛嬌がある」「動きが不規則だから面白い」とも思うようになり、「命に良いも悪いもないと気づく」経験をしたという。

3) 保護者・地域住民と自然資源 保護者によっては、子どもがふれあう自然物の安全性を懸念する声があがることもある。例えば、先述した毛虫の飼育の事例では、「かぶれ」などの健康被害が出ることを心配した意見が寄せられた。それを受けて、クラスでは子どもたちは室内で安全に飼育できるように何度も話し合いをし、保育者とともに「専門家に問い合わせ」たり、「本をさらに調べたり」したという。そして、それらの取り組みを逐次、園からの「お便り」などで保護者に伝えた結果、「毛虫をよく知って」いる保護者からの理解を得、飼育に適した種類を選ぶ際に助言をもらうことが叶った。また、園での栽培活動は、地域の「保育ボランティア」に支えられているところが大きい。稲作については、水田の管理や稲刈り後の脱穀作業、米を蒸して餅に加工する作業過程で、器具や場所の提供、具体的な指導を受けている。

4) 遊び・活動の支援において重視されること 自然物を扱うときに限らず、全員が同じ物事を「一斉同時に経験」し同じだけの達成感を味わう必要はないと考え、「経験」への「満足度」を子ども間で「均一」にしようとはしていない。常に、子どもの「気づき・興味・関心」を「出発点」として、保育者にできることを「いろいろ考える」。その際には、重大な「ケガ」が起こらないよう「近くで保育者はしっかり見守る」が、「先回りして保育者側がやること決めたり」、「ルールを作ったり」することで子どもの遊びや活動に「枠をはめる」よりも、子ども一人ひとりが自発的に自分のしたいことを追求できるような手助けを心がけるようにしている。

東信地区

上田市における保育・幼児教育

まず、上田市の保育・幼児教育の概要をまとめ、次いで、上田市武石保育園（以下、武石保育園）、上田市室賀保育園（以下、室賀保育園）、上田市すがだいら保育園（以下、すがだいら保育園）での視察内容を園ごとに報告する。上田市は、「令和2年3月に『第2次上田市子ども・子育て支援事業計画～上田市未来っ子かがやきプラン』を策定」し、「第2次上田市総合計画ほか上田市の各計画と連携しながら、子ども・子育て施策を総合的に推進していき、切れ目ない支援による子育ての環境」を充実させることで「すべての子どもが笑顔でしあわせに暮らせるまち」を目指している（上田市健康こども未来部子育て・子育て支援課，2020a）。上述のプランにおける「子どもの成長を支える視点」の中で、「幼児期の人格形成を培う教育・保育について

は良質かつ適切な内容及び水準のものとなるように配慮し、子どもの健やかな成長と発達が保障され、『児童の権利に関する条約』に定められている『子どもの最善の利益』が実現される社会に向けて、「心豊かな子ども」の育成を保育目標に掲げている（上田市健康こども未来部子育て・子育て支援課，2020b）。上田市内には、公営の就学前の保育施設として、武石保育園、室賀保育園、すがだいら保育園を含めた29の保育所がある。

武石保育園

1 園舎周囲の環境

武石保育園は、近隣に地域の自治センターや、公園、神社・仏閣、また、上田市の博物館などが点在し、周囲には田畑が広がっている。子どもと保育者は日常的に散歩に出かけ、道中でシダレザクラ、ハナモモ、トチノキといった地域の自然物と触れ合う機会が多い。また、園所有の畑で、農家から助言指導をうけながら栽培活動を行っている。園庭は主に平地部分からなるが、その周辺にブランコや鉄棒などの固定遊具と、藤棚、築山、高木が育っている。



図3 武石保育園の園庭の様子

2 参観時の保育の流れ

視察当日は上田市学園都市推進室の支援を受けて、上田市指定の天然記念物^{注4}でもある武石（ブセキ）^{注5}を探す「ブセキさがし」が行われた。年長児と保育者に加え、鉱物の専門家、上田市の職員が参加し、県道62号線を挟んで武石公園の向かいにある砂礫地（私有地）でブセキ収集に臨んだ。視察時間帯の保育の流れは図4にまとめた。

9:15- 朝の会
9:30- 鉱物の専門家による活動の説明
（活動の目標、ルールと注意事項）
（実際のブセキの例の確認）



9:40- 移動
10:00- 活動場所でのブセキさがし活動
10:45- 移動
11:05- 園での活動のまとめ
11:20- 昼食

図4 視察時間帯の保育の流れ

3 地域の自然資源を活用した保育の実践

1) 子どもと自然資源 子どもたちは日頃から、園の敷地内、敷地外の武石地域のそれぞれで自然物と密にかかわり、自宅に戻った後はその経験を家族と共有するなどしている。小動物に関しては、ときに飼育に至ることもあるが、年長に近づくと、それまでの経験から、「ケガしている」ような場合は「自分本位で触ったり捕まえたり」するような行動を「抑える」姿も見

られる、「観察」とどめる様子もある。視察当日に企画されたブセキさがしは、よく利用する武石公園で子どもが夢中になって行っている遊びの一つでもあった。活動場所は、通常出かけている公園よりもブセキが見つかりやすい地質であったため、日ごろは見つけ出せずに「くやしい思いをしてた子」も、一つ以上のブセキを探し出すことができた。

2) 保育者と自然資源 奥山のような手つかずの自然地に赴かなくても、園の敷地内には草花、石・砂・土、水、畑で栽培中の野菜、それらを生育の場とする虫をはじめとする小動物が存在している。保育者は、こういった「子どもにも保育者にも家庭にも身近な」対象を保育で扱う主たる自然物としてとらえている。飼育活動に関しては、保育者によっては、虫などの場合、「数がいると」「ワオってなる」こともあるが、子どもが関心を持った以上、保育者は「意を決してやる」。また、武石公園のような、園の敷地外にある自然地や「そこにしかないもの」も、子どもや保育者にとっては「大事で貴重」である。「自然の中の遊びには正解・不正解がない」ため、子どもたちは個々が「違う活動」をしていても「怒られる」ことがなく、「保育室ではうまくいかないことが多い子も自然の中ではのびのびよく遊べていて」、保育者はそのような「子どもの様子に気づいて」、彼らの「いいところに注目」できる。

3) 保護者・地域住民と自然資源 全ての保護者が生き物に寛容なわけではないが、「家で虫の飼育をしている子も多いので」、園における子どもの自然物とのかかわりは比較的「受け入れ」られている。子どもが園で捕まえた虫を示したときに保護者が拒絶の意思を表した場合は、子どもと生物との具体的なエピソードを伝え、保護者に「見せたいと思った子どもの気持ち」が理解されるようにしている。また、武石地域の住民には、ブセキさがしのような園外活動の場所を提供してもらっただけでなく、「保育サポーター」として「園内を整備してもらったり」、「地域の良いものを子どもたちに食べさせたい」と考える農家の有志および生活農業協同組合から「地元の農産物を食材として届けてもらったり」している。それに対して、園では、武石地域の伝統行事を引き受け、子どもとともに実施することで地域文化を守る取り組みをしている。

4) 遊び・活動の支援において重視されること 保育の基本は、「今、この子たちは何に興味があるのかな」と考えるところにある。一斉での活動も「子どものやりたいと思う気持ちを出発点に」考えていけば、「子どもも保育者も楽しく取り組めるし頑張れる」上に、「子どもたちってすごいんだ」という気づきに至ることができる。また、比較的整備されていない場所での園外保育では、特に大けがにつながる事故を防ぐことに注力している。活動場所までの移動で、車が行き来する道を横断するときは「飛び出し」や「立ち止まり」をしないというルール、岩場などで活動するときは滑落防止を第一に「順番を守って移動し、前の人を追い抜かない」というルールが守られるよう、子どもの列の最前と最後で複数人の保育者が様子を見守り、声掛けする。そして、「園の子どもも保育者もみなが武石地域の一員」と考え、感染症拡大防止対策下では、園外保育時には住民の心情に配慮した行動を心掛けている。

室賀保育園

1 園舎周囲の環境

室賀保育園は寺社仏閣、古墳が近く、周囲を田畑と山に囲まれている。また、園舎の裏手に遊歩道のように徒歩移動可能な小道が通っており（図5を参照）、半径1km圏内に1級河川が流れている。子どもと保育者は日常的に散歩に出かけ、道脇に生息する植物や小動物と直接的に触れ合っている。園庭では、平地部分の周囲には、ブランコや砂場などの遊び場があり、虫が住処にしたり餌にしたりできる植物を鉢植えで育てるなどしている。

2 参観時の保育の流れ

視察当日は、園の敷地外を散策しながら自然物を収集する「あきさがし」の活動が行われ、保育者とともに年長児・年中児・年少児が異年齢混合で参加した。視察時間帯の保育の流れは図6にまとめた。

3 地域の自然資源を活用した保育の実践

1) 子どもと自然資源 日頃から、園周囲の里山的環境の中で植物や小動物を実際に「手に取ったり、匂いを嗅いだり、お土産にしたり」し、自然物全般への興味関心は高いという。散歩の道程では予期していなかった鹿などの動物の角を発見することもあり、状態が良ければ持ち帰って、園全体でその出来事を共有するなどしている。「山や沢が近い」ために園庭や園舎内でも、虫や爬虫類をはじめとする小動物を見つけることができるが、鉢植えを育てて小動物に必要な生育環境を整えることで、生き物と出会う機会を自分たちで作る努力もしている。飼育を含めて小動物と直接かかわる経験は、その小動物に対する「知識や愛着、責任感」の獲得を促すだけでなく、生き物の扱いをめぐる「子ども同士で話し合う」機会や、「触りたいけど触れない、でも触りたい」ときに仲間を頼ったり助けたりする機会をもたらす。

2) 保育者と自然資源 室賀保育園の保育者にとっては、特に、自然物は、「園の外に一步出れば」会えるもので、子どもたちにとって「特別な準備なく経験」することができるものであるため「日常の生活の一部」となっている。一方で、上田市学園都市推進室との連携事業などで専門家を交えての園外保育を行うことを通して、身近にありながらも「知らないことがま



図5 室賀保育園の園舎裏の小道

- 8:30 - 子どもたちの登園
朝の自由遊び・朝の活動
- 9:40 - 散歩/秋季らしい自然物の収集
- 10:45 - 空き地でおにぎりを食べる



- 12:15 - 帰園後の活動の振り返り

図6 視察時間帯の保育の流れ

だまだあるもの」であり、「子どもと一緒に体験」して理解を深めていく対象ともみなされている。「子どもと一緒に体験」する過程で、保育者には、自然物についてだけでなく子どもの発話や行動などを通して一人ひとりの育ちについて毎回発見があり、「子どもは色々なことを感じる力がある」と気づかされるという。また、室賀保育園周囲にあるような地域環境は市内の「どの園にもあるものではない」ことから保育者にとっては「ありがたいもの」ともなっている。

3) 保護者・地域住民と自然資源 これまでに、子どもとともに「保護者も自然物を楽しむ」機会、「子どもたちが遊んでいる場所、いつも行く遊び場」で一緒に遊ぶ機会を設けるなどしてきたこともあり、ほとんどの保護者は園での自然物とかかわる子どもたちの遊びや活動に理解を示している。ただし、子どもが捕獲した虫・トカゲなどの爬虫類を「お土産」として自宅に持ち帰ろうとすると「驚かれる」ことがあるので、そのような場合は、子どもの「捕えたときの興奮や喜びを家族と共有したい気持ち」を第一に考え、その日の遊びや活動の「お土産に繋がったいきさつ」を口頭や連絡帳を通して伝えるよう努めている。このような園の試みに対して、保護者は年3回、地域の回覧板で保育園の様子を取り上げ、「保育園でこんなことをやった・こんなものを作っている」などを報じている。また、園近隣の住民からは、園外保育の場として、私有地を提供してもらい、子どもたちが活動しやすいように土地の整備してもらいなどしている。それに対して、園からは、子どもの学びの成果を先述の回覧板等を活用して公開するなどし、地域と応答的な関係を築く努力をしている。

4) 遊び・活動の支援において重要視されること 室賀保育園では、子どもたちが「豊かに育って」いくことを促す手立てとして地域の自然資源の活用を実践している。飼育は特に、子どもに科学的な「探求心」をもたらし「愛着」、「責任感」などを抱くきっかけを与える活動であるが、命をあつかう活動でもある。どんな生き物をどこでどう飼うかは「子どもと担任と一緒に話し合って」「捕まえた先のことをみんなで分かって」決め、子どもが関与できない期間は保育者が自宅に持ち帰るなどして世話を継続している。いかに飼育対象を「日常的に話題にできるか」が、「飼うことを通しての子どもの育ち」の深さを左右するとし、保育者も子どもと飼育対象について調べ、近くでよく「観察」することを繰り返す。また、園外での自然とかかわる活動では、交通事故や大きなトラブルが起らないよう、当日のコースや時程、服装、緊急時用の準備物、トイレの場所、保育者の配置を事前に職員間で確認し、子どもや保護者と情報共有しておくという。現状の室賀保育園での実践は、園の立地だけでなく、自然物が「良い材料になる」と知っている保育者がいること、在籍児の数に対する「保育者の配置に無理がない」ことなどの「条件をクリアして」可能になっている。「公立園では職員の異動もある」ため、「今やれてることをどう続けてくか」が課題とされる。

上田市すがだいら保育園

1 園舎周囲の環境

すがだいら保育園は、周囲を畑に囲まれ、近隣には遊歩道を備えた湿原、高原から流れ出ている河川等があり、子どもと保育者は園周囲の地域を積極的に散策し、自然物を用いて活動したり、自然地で遊んだりしている。園外活動で赴く場所では、鹿や熊など大型の野生動物が確認されている。また、園庭は平地部分の周囲に芝生が植えられ、ブランコや砂場などの固定の遊び場に加え、高木や生垣が植えられている(図7を参照)。

2 参観時の保育の流れ

すがだいら保育園では、比較的長い距離の散歩が主たる活動となる園外保育は、週半ばの火曜日・水曜日・木曜日に実施し、なじみのある場所でなじみのある遊具・玩具を用いて遊ぶことを楽しむ園内での保育は、週明けの月曜日と週末の金曜日に行う。月曜日は子どもが「園での生活リズムを取り戻す」ため、金曜日は「一週間の疲れ」からくる大きなけがを予防するために園内で過ごす。視察当日は週末の金曜日であつたため、子どもと保育者は園内で過ごしていた。視察時間帯の保育の流れは図8にまとめた。

3 地域の自然資源を活用した保育の実際

1) 子どもと自然資源 子どもたちは地域を散歩する中でその季節を代表する自然物や自然現象を見つける活動として「きせつさがし」を行うことが多い。子どもたちの森遊びの活動では保育者に加えて、ときに、地域の自然学校の講師も同行することがある。また、散歩や遠足は、子どもの年齢に応じて歩く距離が異なり、2歳未満の子どもはごく近隣の施設に出かけ、自然物集めをしたり、園では味わえない砂利道の感触を楽しんだりするなどしている。一方、3歳以上の子どもは、比較的遠方の観光地にもなっている池や神社まで、徒歩での移動そのものを楽しみ、遠足時には、目的地で持参した弁当を食べて帰園する。園内で過ごす場合は春夏は水・砂土を素材にした「どろんこあそび」や庭木を「おうち」に見立てた「ごっこあそび」、



図7 すがだいら保育園の園舎と園庭

- 9:00- 年齢ごとに朝の活動または外遊び
- 9:40- 朝の活動を終えたクラスは外遊び
外遊びを終えたクラスは発表会練習
- 10:10- 全年齢児の園庭での外遊び



- 11:00- 片付け・帰室・昼食準備開始

図8 視察時間帯の保育の流れ

秋冬には落ち葉・雪を素材にした「カマクラづくり」「園庭にできた大きな雪山での遊び」などが盛り上がる。

2) 保育者と自然資源 保育者にとって、すがだいら保育園の園庭や周辺地域で体験できる自然は、「あらためて深く考えたことがないくらい身近に当たり前にあるもの」として認識されている。子どもだけでなく保育者や保護者においても、「菅平の自然の中で日常生活を送って」おり、自然物と関わることそのものが菅平高原で生活することであるので、「自然体験も日常の生活体験の一部」としてみなしている。

3) 保護者・地域住民と自然資源 在園児の家庭は、菅平高原に「もう長く住んでいたり」、「この土地の自然を理解して、惹かれて選んで」住んでいたりするためか、園が積極的に自然体験を保育に取り入れることには肯定的である。保護者からは「どんどんやってください」と、自然体験活動に補助金をつけてもらったり、「どろんこ着」などの遊びや活動に必要な服装などの準備を快諾してもらったりしている。ただ、保護者によっては、子どもが散歩の道中で捕まえた「虫や爬虫類をおみやげ」に自宅へ持ち帰ろうとすると驚くこともあり、そのときは、「素直に子どもに『お母さん驚いてるよ。どうする？』と聞き」、その子に判断をゆだねるという。子どもによっては、自分と家族の心情に折り合いをつけた回答を示すこともある。また、すがだいら保育園では地域住民との関係作りをていねいに行い、さまざまな支援を受けて園外保育などでの自然物とのかかわりの機会を獲得しているという。地域からの支援を受けて行われているものに、私有地の畑での野菜の収穫活動、花農家での摘花と「ドライフラワー作り」、冬期の園庭やゲレンデでのソリ・スキー体験などがある。

4) 遊び・活動の支援において重視されること 自然物とのかかわる遊び・活動に限らず、すがだいら保育園では、子どもが「やりたいと思う気持ち」を重視し、「自分で経験したがっていること」「今やりたいこと」を追求できるような環境づくりを行っている。子どもが「まだ“遊びたかった”を受け止めてもらえる」ことが発達において重要と考え、例えば、「午前中はしっかり遊んで」「遊びを満足させてからお昼」を食べることができるように、クラスによっては昼食時間を当初の予定からずらすこともある。また、園外で自然物をめぐる遊び・活動をする場合は、特に、子どもの「交通事故と行方不明」を防ぐため、保育者は蛍光ビブスを着用し、「道路横断は短時間で一斉に」行うよう心掛け、出発・到着時は特に「点呼を徹底」している。また、散歩の目的地は大型の野生動物の生息地にも近いことから、「熊鈴」など動物除けの道具を携帯し、「はじめて行く場所には必ず下見」を行う。現在、園内研修の一環として、園外保育の体験の中での、「この場所に行くと触れあえる自然物」や「この場所でできる遊び」の情報を「職員のためのお散歩マップ」にまとめ、新たに異動してくる職員の参考資料として残すことを検討している。

南信地区

伊那市における保育・幼児教育

まず、伊那市の保育・幼児教育の概要をまとめたうえで、伊那市立西箕輪保育園（以下、西箕輪保育園）、伊那市立西箕輪南部保育園（以下、西箕輪南部保育園）での視察内容を園ごとに報告する。伊那市は、平成17（2005）年の中央教育審議会の答申および平成20（2008）年の保育所保育指針・幼稚園教育要領・小学校教育要領の告示を受けて平成22（2010）年に「幼保小連携推進委員会」を立ち上げ、幼稚園・保育所および小学校の教職員が、「子どもの発達の特徴とそれぞれの段階において育てたい子どもの姿」に対する「共通認識」を持って、子どもの学びの場を円滑に接続し、「連続性・一貫性を持った育ちと学びを支えて」いくことを目標に掲げてきた（伊那市教育委員会，2013）。この流れを背景に伊那市の公立保育園では、『『あーおもしろかった！』という、様々な体験を通じ、『生きる力』のある子ども』を育めるよう、「すべての子どもを愛し、守り、保護者や地域に愛される保育園」となることを目指している（伊那市役所保健福祉部子育て支援課，2016）。伊那市内には、公営の就学前の保育施設として、西箕輪保育園、西箕輪南部保育園を含めた20の保育所^{注6}がある。

西箕輪保育園

1 園舎周囲の環境

西箕輪保育園は、住宅街に位置し、伊那市立の小学校が隣接し、中学校やそのグラウンドと学校林も近くにある。子どもと保育者は、この学校林で出かけ、しばしば自由遊びを行う。園庭は山の斜面を活かして作られており、傾斜している一画には山に自生していた落葉樹が複数残され、秋冬は落ち葉が多く積もる。また、園庭中央の平地部分以外には下草が生え、意図的に剪定していない生垣がある（図9を参照）。

2 参観時の保育の流れ

視察当日は年長児が学校林に散策に出かけ、年中児・年少児・2歳未満児は園庭で自由遊びを行った。視察時間帯の保育の流れは図10にまとめた。

3 地域の自然資源を活用した保育の実践

1) 子どもと自然資源 子どもたちは、「園内か園外かを問わず」、戸外での遊び・活動を通して、日常的に地域の動植物とかかわってきている。学校林を始めとする人の手が入っていない場所での遊び・活動では、「変化のあるでこぼこした地面」を味わいながら、色形が多様な「キノコ」などの自然物を見つけては、仲間と想像を広げて楽しむ様子が見られる。

一方、園内での遊びや活動においては、園庭が「虫」の生息地となる条件を整えているためか、頻繁に虫と触れ合っており、クラスで飼育する場合は、子どもたちが対象となる「虫が寿命を全うするまで世話」をしている。また、「食育」の取り組みでもある農作物の栽培・収穫活

動では、複数種類の野菜や米を育て、夏・秋にそれらを取り入れ、調理して食べることも経験している。

2) 保育者と自然資源 保育者にとって、学校林などの園庭ほど整備されていない場所は、子どもにさまざまな「運動を経験」させ、またキノコをはじめとする見慣れない動植物に「わくわく」する経験をもたらしうる場所である。そのため、子どもたちの「遊びのヒントがいっぱいあり、足を向けるだけで遊びが生まれ」、園にある玩具のようなものが「何もなくても、なければならぬに、無意識に工夫したり思いついたり」できる。自然物は、季節ごとの変化が大きく「この前あったはずの倒木が、数ヶ月後に来てみたら無くなっている」などの「いつも同じでないんだということ」を保育者にも学ばせる。加えて、自然物は「楽しさだけでなく怖さも持っていて、人の害になるハチのような虫やウルシのような植物が実際に」あり、また、虫全般のように、保育者に「見た目からの苦手意識」を抱かせるものもある。「苦手意識」は、「どれくらい『子どもともう一歩進んでみようかな』と強く思えるか」で克服に向けての努力の程度が変わるといふ。

3) 保護者・地域住民と自然資源 保護者からの「理解」と「支持」を得て、散歩や遠足で園外に積極的に出かけ、地域の自然物とのかかわりを促すようにしている。年長児クラスの子どもたちが日常の遊びや活動で携帯する「むしめがね」などの道具も、「虫に没頭する年長児」の活動を知った保護者会から、「図鑑で調べるだけでなく、もう一歩迫れるといいよね」との意図で、購入時に援助を得た。また、保護者会は「夏祭り」などの行事を主催するなど、保育者とともに、幼児期の子どものさまざまな「体験を支える」存在となっている。加えて、地域住民とともに毎年恒例となっている季節の行事を実施している。地域の農業経験者が「畑の先生」として、栽培時には「苗の植え方、種の撒き方、手入れの方法」などを習う。また、飼育活動に対しても、年によっては、カブトムシの幼虫の提供を受けることがあり、育て方なども助言を受けて、クラス単位で子どもと育てていくこともある。



図9 西箕輪保育園の園庭の一面

9:05- 朝の活動
9:25- 午前の外遊び
年長児による学校林での散策



年中児・年少児・2歳未満児による
園庭での自由遊び



10:55- 片付けと昼食準備

図10 視察時間帯の保育の流れ

4) 遊び・活動の支援において重視されること 西箕輪保育園では、自然物とのかかわりの有無によらず、子どもの「どんな遊びや活動も、食べること、動くこと、眠ることがきちんと送られて初めて成り立つ」と考え、そのため、基本的生活習慣の確立を重要視している。「生活のペースができる」ことで、子どもは「遊びたい感覚」が出て「実際に動き回って、楽しみながらいつのまにか、まわりのものに気が付いて、興味を持って、かかわるようになる」。自然物とのかかわりもその過程に組み込まれるものとし、「楽しみたい気持ちがあるから、結果として生き物について知れる」ことができるとする。そのため、保育者はまず、基本的生活習慣獲得の支援を行い、次に、子どもの「楽しみたい気持ち」を広げられるように「保育者も、こんな遊びをしたい、これやりたいというものを見つけて」追及するよう努めている。ただし、自然地だけでなく、すべての場所での遊び・活動にあたっては、重大なケガにつながるような事故を防げるような安全対策が必須であり、保育者は、活動前の準備に加えて、活動時の職員の配置や「状況の報連相をしっかりと」行うことを心掛けている。

西箕輪南部保育園

1 園舎周囲の環境

西箕輪南部保育園は周囲を畑に囲まれ、園舎の裏手には私有地の山林が広がり、その中に、子どもと保育者の日常的な外遊びのフィールドである「やまのひろば」がある。また、園庭には複数種類の落葉樹が育っており、秋季は特に、木の実や紅葉が地面に落ちる。落ち葉や枯草は意図的に取り除かず、遊びや活動時の材料となっている（図11を参照）。

2 参観時の保育の流れ

視察当日は、「やまのひろば」に出かけ、目的地までの道中では「山にあるすてきなもの」を採集しながら移動し、目的地では自由遊びが行われ、年長児・年中児・年少児と担任保育者が参加した。視察時間帯の保育の流れは図12にまとめた。

3 地域の自然資源を活用した保育の実践

1) 子どもと自然資源 子どもたちは、園生活を通じて、異年齢の仲間とともに「やまのひろば」や園庭で自然物を集めたり、自然物を用いて遊んだりする経験を積み重ねてきている。この経験の積み重ねによって、園外の自然地に近いフィールドでの行動上の注意事項が定着している子も多く、先述した「やまのひろば」でも年長の子どもが年少の子どもにルールを伝えながら遊ぶ様子が見られた。日ごろから、「何だこれ」と思う「大きいキノコ、小さいキノコ」、「ヤマブドウ」や「ツクバネ」といった自然物を直接的に手にして遊んでいることから、年長になるほど前もって目的地で「やりたいこと」が定まっており、自然物を用いて継続的な見立て遊びに没頭する子もいる。また、毎年、夏場は園舎近くにある「ひまわり迷路」での散策や畑での野菜の栽培にも臨み、年間の園生活は多くの部分が自然物とのかかわりで構成されている。

2) 保育者と自然資源 先述した「やまのひろば」までの道中で、子どもが沢をのぞき込み、しばらく「カニ」を探していたことに注目し、保育者は口々に「また来れるかなあ」と述べ、次回の活動時には装備などを整えてサワガニ採集の実施を検討していた。保育者にとって、山林をはじめとする自然地や里山を構成する様々な自然物は、次の日以降の保育を計画する視点をもたらす。さらに、自然地は、年間での季節による変化に加えて、一日の中でも時刻による変化、つまり太陽の日周運動によって生じる、光や温度に見られる変化を明確に体感できる場所である。また、人の手が入りにくい場所ほど、完全に制御しきれない「土砂災害」や「熊」をはじめとする野生動物などと「共存しているという意識」を持ち、十分な準備をし、連絡体制を整えて臨む必要性を感じさせる場所でもある。



図 11 西箕輪南部保育園の園庭の様子

- 9:00 - 朝の活動：園庭での体操
 9:25 - 「やまのひろば」への移動
 道中での自然物採集
 9:55 - 「やまのひろば」での自由遊び



- 11:00 - 園への移動
 11:15 - 帰園、遊び・活動の振り返り

図 12 視察時間帯の保育の流れ

3) 保護者・地域住民と自然資源 保護者が、西箕輪の地域運営委員を務めていたり、林業に従事していたりすることもあり、保育園を含めた地域の環境整備に対して意欲的で、自然体験をはじめとする園外での活動に受容的である。「やまのひろば」での遊び・活動など、地域住民の私有地の一部を借りて可能になっていることも多く、また、栽培活動では、毎年、その土地の所有者や農業従事者の協力を得て、「畑の先生」として苗を育てるところから収穫までの農作業に関わる指導を受けている。自然資源の取り扱いの有無によらず、保育は「地域の人がなければ成り立たない」と考え、園の保育を地域回覧用の広報資料にまとめて年間3-4回のペースで発行するなどし^{注7}、子どもが経験したことや経験を通しての成長を、保護者を含めた地域住民と共有するよう努めている。「地域から気かけられ」、園も「地域を気かけられる」ような双方向性のある関係作りを目指している。

4) 遊び・活動の支援において重視されること 西箕輪南部保育園では、子どもが「どんな場所の保育園で育ったとしても経験しておかないといけないことが経験でき」、また、伸ばすべき力を伸ばしていけるような援助が目指されている。特に、子どもが園での生活を通して、「さまざまな他者の存在を感じ」て、ぶつかり合っても「同年齢の子ども同士で折り合い」をつける力を育て、「集団としての育ち」に至ることが重要視されている。自然資源を遊びや活動に取り

入れる場合も、それによって子ども同士の関係がどう育つかを考える。自由遊びの一環で自然地に赴いたり、「自然とかかわったりだけでは経験できないことはクラス保育」の中で学べるように一斉での指導にも重要な意味があるとする。

総 括

ここまで、長野県内の中信地区・東信地区・南信地区にある信州型自然保育認定制度で普及型に認定された6つの公立保育園における、地域の自然資源を活かす保育実践の事例と各園の保育者による自園での保育に関する談話について報告してきた。6つの園の報告の概要を一覧化したものが表2である。前節でまとめてきた各園の様子と表2をふまえ、以下では、各園における地域の自然資源を活かした保育の実際を、子どもと自然資源、保育者と自然資源、保護者・地域住民と自然資源、遊び・活動の支援において重視されること、という4つの点から整理し、総括したい。

子どもと自然資源

視察対象となった6つの園の子どもたちは、日常的に、自園の園庭に加えて、園所有の畑や地域の公園などの公共施設、園とそれらをつなぐ小道、さらには地域の私有地である田圃や山林等を遊びや活動のフィールドとしている。そのような場所で、子どもがかかわる自然物には、砂・土、泥、水、草花、爬虫類や節足動物などの自然保育認定園以外の多くの保育施設でも直接体験しやすいものもあれば（原田・山崎・内田，2021）、特定の地域に立地する園だからこそ実際に遭遇できるものもあった。例えば、「ブセキ」^{注8}や大型野生動物の「角」^{注9}、色形の多様な「キノコ」^{注10}、「カマクラ」を作れるほどの降雪^{注11}などが該当するであろう。こういったさまざまな自然物は、それらを体験可能な場所をより特別かつ魅力的に見せ（Kaplan, 2009）、子ども一人ひとりから探索行動を引き出すとともに（今井，1990）、その探索行動へ没頭させるきっかけ、つまり充実した個としての遊びのきっかけになっている。

また、6つの園のいずれにおいても、子どもたちは自然物の中で爬虫類や節足動物などの小動物に関心を寄せやすく、その関心が高じて触れてみたい、身近に置いて世話をしたいといった欲求が湧き起こるようであった。実際に、中長期にわたるクラスでの飼育活動では継続的なかわりを通して、子どもは飼育対象に「愛着」を芽生えさせるようである^{注12}。そして、その「愛着」が、生命を預かっているという「責任感」に通じ、責任を共に担う仲間や保育者と小動物のケアについて協議したり、専門書を読んだりしてより深く対象を理解したいと駆り立てる。その結果として、小動物に対するより体系化された知識の獲得、加えて、人間中心的なふるまいの抑制につながっていくのかもしれない。ここには児童期以降に続く、他者のためになることを進んで行おうとする態度（宮里，2008）としての愛他性（altimus）の育ちをみとることがで

表2 6つの信州型自然保育認定園での視察報告の概要

視点	中 信		東 信		南 信	
	筑北ひまわり保育園	武石保育園	室賀保育園	すがだいら保育園	西箕輪保育園	西箕輪南部保育園
周辺環境	・園舎の北側には山、東側には田畑が広がっている	・近隣に自治センターや、公園、神社・仏閣、博物館などがある。園舎周囲には田畑が広がっている	・寺社仏閣、古墳が近くにある。園舎は田畑と山に囲まれ、裏手に散歩で使われる小道が通っている	・周囲を畑に囲まれ、近隣には遊歩道を備えた湿原、菅平高原から流れ出る河川等がある	・小学校が隣接し、学校やそのグラウンドと、近くには、外遊びフィールドである学校林がある	・周囲を畑に囲まれ、園舎の裏手には、外遊びのフィールドを含む私有地の山林がある
園庭	・平地部分と傾斜地部分がある ・意図的に、下草や落ち葉を取り去らず、庭木の一部は剪定していない	・平地部分の周囲には、ブランコや鉄棒などの固定遊具に加えて、藤棚、高木、築山がある	・平地部分の周囲には、ブランコや砂場などがある ・虫の住処、餌となる植物を栽培している	・平地部分の周囲に芝生が植えられ、ブランコや砂場などの固定の遊び場に加え、高木や生垣が植えられている	・平地部分と傾斜地部分がある ・傾斜地の一面には落葉樹林となっており、平地部分の遊具がある場所も下草が生えている	・平地部分の周囲に芝生が植えられ、複数種類の落葉樹が育っている ・意図的に、落ち葉や枯草は取り去らず残している
子どもと自然資源	・近隣の田畑での栽培・収穫活動や虫の飼育活動に臨み、その経験を異年齢の仲間間で共有する ・散歩の道中で近隣の田に見られる季節ごとの変化について絵本や図鑑を通して児学習する	・地域の公園では、市の天然記念物に指定される石を探す遊びを通して、園のある地域固有の地層でのみ採集される鉱物と直接触れ合う ・その他では、虫の飼育・観察や野菜の栽培を行う	・散歩の道中では、動物の角などを、園庭や園舎内では小動物を発見する ・園内では、飼育活動を行うとともに、虫などの生育環境となる植物を栽培している	・散歩・遠足では、その季節を代表する自然物や自然現象を見つける活動を行う ・園内でも季節に応じて水、砂土、植物の葉などを素材にした活動を行う	・学校林での遊び・活動では、移動運動を通して変化に富む地形を味わい、キノコなどの自然物を見つけて仲間と想像を広げ楽しむ。 ・その他では、虫の飼育や野菜・穀物の栽培を行う	・近隣の散歩の道中や、私有地の山林内のフィールドで、異年齢の仲間とキノコなどの自然物を用いて遊んだりする ・その他では、近隣の田畑での散策や野菜・穀物の栽培を行う
保育者と自然資源	・保育者にとっての自然物や自然地の意味を簡潔に語るのは難しい ・虫に苦手意識があっても、飼育を通して、直接的なかわりをもつことで「愛嬌」などを感じ、「命に良いも悪いもない」という気づきに至ることがある	・保育に活用する自然物は、多くは身近にある草花、石・砂・土、水、野菜、虫などである ・自然は、子どもに「正解・不正解がない」遊びの機会、保育者には子どもの「いいところ」に注目する機会を与える	・地域の自然物は、「園の外に一步出れば」「特別な準備なく経験」できる一方で、未知の部分が多くあり体験的理解を深めていくべき対象といえる ・保育者に、子どもの中の「感じる力」を気づかせるものでもある	・地域の自然や自然地は、「身近に当たり前にあるもの」である ・子どもだけでなく保育者や保護者にとって、自然物や自然地は「日常の生活体験の一部」として経験されるものである	・十分に整備されていないが自然物に満ちた場所は、子どもにとって遊びのヒントを多く内包する ・玩具がなくても「ないなりに」、「工夫したり思いついたり」する機会を与える場所であり、季節による変化を教える場所である	・自然地や自然物は、次の日以降の保育を計画する視点をもたらす ・自然地は、季節による変化に加えて、一日の中での変化も体感させ、また、制御しきれない災害が起こることもある場所である
園と保護者	・保護者からは、自然物とのかかわりに関して意見や助言をもらうことがあり、それらを受けて、園では、子どもと保育者が取り組んだことを園だよりなどで発信している	・保護者は、園での、子どもと虫などのかかわりには概ね受容的・拒否的な意思表示があれば、自然物とのかかわりの中での子どもの経験や心情を保育者が代弁し伝える。 ・保護者は園の活動を地域回覧版で広報している	・保護者は、園での、自然物とのかかわりに理解がある ・子どもが捕まえた虫などに驚かれたときは、自然物とのかかわりの中での子どもの経験や情を保育者が代弁して伝える。 ・保護者は園の活動を地域回覧版で広報している	・保護者は、園での、地域の自然物や自然地とのかかわり肯定的。保護者会から自然体験活動に補助金が出るなどする ・子どもが自宅に虫などを持ち帰ることに躊躇されたときは、子どもに、保護者の心情を伝えて判断を委ねる	・保護者は、園での、自然物や自然地とのかかわりに理解を示し支持的である ・遊び・活動の中で携帯する「むしめがね」などの道具の購入を補助したり、「夏祭り」などの毎年の行事を主宰したりしている	・保護者は、地域の環境整備に対して意欲的で、自然体験をはじめとする園外での活動に受容的である
園と地域	・野菜・穀物の栽培は、地域の「保育ボランティア」に支えられ、土地の管理や作業過程で用いる器具や場所の提供、具体的な助言指導を受けている	・私有地を、園外活動の場所として借りうけるほか、「保育サポーター」に園内の整備を担ってもらったり、地元農産物の提供を受けたりする ・園では、地域の伝統行事の実施を請け負い、子どもとともに実施している	・私有地を、園外保育の場として、提供してもらったり整備してもらったりしている ・園からは、子どもの学びの成果を回覧版などを通して地域に公開している。	・私有地を、園外活動の場所として借り、特に畑では野菜の収穫活動、花農家での摘花活動を行うなどしている ・冬期のソリ・スキーの指導、一年を通じての自然学校からの自然物とのかかわりに関する指導を受けるなどしている	・私有地である畑を借り、野菜の栽培・収穫活動を育てる活動を行い、活動の中で、地域の農業経験者が「畑の先生」として参加している ・年によっては、カブトムシの幼虫の提供を受けてクラスで飼育することがある	・私有地を、園外での遊び・活動の場所として借り受けており、特に、栽培・収穫活動は、土地の所有者や農業従事者とともに実施している。 ・園からは地域回覧資料等を用いて定期的に保育活動を発信するなどし、地域住民と双方向性のある関係作りを目指す
遊び・活動の支援で重視されること	・子ども全員が、同じ物事を一斉同時に経験して同じような満足度を得ることよりも、一人ひとりが自分の「気づき・興味・関心」に基づく探究活動に打ち込めることを重要視する ・戸外での遊びでは、重大なケガを防ぐよう見守りつつもつつも、保育者が先回りして子どもの遊びや活動に「枠をはめる」ことがないよう心掛けている	・子どもの興味関心を起点とする保育計画を立てることで、一斉の活動も、子どもと保育者の双方が楽しく頑張れる活動にする。 ・園外での保育は重大なケガを防げるよう、また、地域の一員としての自覚をもって行動ができるようルールを定め、守れるよう援助する	・自然とのかかわりは、子どもたちが「豊かに育って」いくことを促す一手立て。特に、飼育経験からの学びは、飼育対象をどれだけ「日常的に話題にできるか」にかかっている ・園外活動では事故などが起こらないよう、事前準備を入念に行う ・移動を見越し、現在までの資源活用の実践を新任者へどう引き継ぐかを課題としている	・子どもの意欲を重視し、子どもが今、経験したいと思うことを追求できる環境づくりを目指す ・地域における園外保育では交通事故と行方不明を防ぎ、大型の野生動物を避けられるよう事前の準備・装備を徹底している ・異動を見越し、現在までの資源活用の実践を引き継げるような「職員のためのお散歩マップ」の作成を検討している	・遊びや活動の前提としての基本的生活習慣の確立を重視する ・子どもの環境探索を促進できるよう、保育者自身も遊びや活動の中での興味・関心を追及するよう努めている ・園外では、重大なケガに至る事故などを防ぐために、職員間での情報共有を密に行っている	・園生活の中で、「さまざまな他者の存在を感じ」、ぶつかり合っても「同年齢の子ども同士で折り合い」をつける力を育て、「集団として」育つことを重視する ・自然とのかかわりだけでは経験できないことは、「クラス保育」で学べるように一斉での指導にも重要と考ええる

きるといえよう。

さらに、この飼育活動では子どもたちは、対象とのかかわりの中で獲得した経験や知識を年少者に伝達する様子も見せており、よって、小動物とのかかわり経験は子どもの中でインパクトを持ち、その経験を他者に伝えたいという欲求を伴って、異年齢間でのコミュニケーションを促進させることが推察できる。このような、子ども自らが経験や知識を年少者や不慣れな者に伝えようとする姿は、例えば、園外の自然地に赴いた際にその場での遊び・活動上のルールの確認時^{注13} にも見られていた。子ども同士で自然物や自然地との付き合い方を共有しあえるようになることで、園外においても、子どもたちは自律的に遊びや活動へ臨めるようになるのであろう。

保育者と自然資源

その一方で、保育者にとって、子どもや自分を取りまく地域の自然資源に対して、例えば、自然地であれば、平地の園庭にはない「運動」と心が「わくわく」と躍るような感情を体験する機会^{注14} を子どもにもたらし場所とみなされていた。また、園庭にあるようなすぐに遊べる遊具や玩具はないが、「なければならないに」楽しむための「工夫」や発想を子どもに促す余地があり^{注15}、その余地があるからこそ、園の中だけでは見とれなかった子どもの「感じる力」^{注16} に気づかせ、子どもの「いいところに注目」させる場所^{注17} でもある。

ただ、保育者によっては、「苦手」な自然物もあり、節足動物やその幼虫には驚いたり、身構えたりはしている^{注18}。それでも、子どもの関心の高さと熱意に後押しされ、「意を決して」物理的な距離を縮める^{注19} ところから始まり、子どもと間近で観察したり給餌したりするうちに対象との心理的な距離も縮小されることが窺われる。その結果、「苦手意識」は完全に払しょくされることはなくても「命に良いも悪いもない」という価値観の変容^{注20} に至っている点は興味深く、子どもと自然物とのかかわりはそこに巻き込まれる保育者にも重要な内的変化を生じさせると言えるだろう。この変化は、専門書を読むことなどによって至る概念的理解だけでなく、子どもを手本とし、また子どもと同じペースで実際に対象と相互作用することで成立した体験的理解にも根差しており、保育者の自然観（越中・杉村，2008）を再構成させるよう促す変化だったのではないだろうか。

保護者・地域住民と自然資源

里山的自然に囲まれた保育園において、子ども保育者が自然物・自然地とのかかわりを通して学び、成長していく過程には、保護者や地域住民の理解と協力が欠かせなかった。保護者は、ときに、安全性の点から、子どもが直接的にかかわる自然物に対しての再考を促す^{注21} ことがある。しかし一方で、子どもたちの自然物への熱意や関心の高さを酌んで、懸念される安全面での課題をいかに解決するか、また、熱意や関心をより科学的な探究活動にいかにつなげるかを、園とともに考え、助言し、必要な道具をそろえるための支援もしていた。特に、それぞれの園

で、子どもが「虫」と継続して直接的にかかわり続けられたことには、「思わず驚くような」ことがありつつも^{注22}、「虫」と、その「虫」に向けられる子どもの熱意や関心を理解しようと努めた保護者の協力が確かにあったであろう。こういった保護者の、子どもに寄り添おうとする努力を、保育者は、おりにふれ、園で自然物とかかわる子どもの姿をその心情とともに伝えることで後押ししている。保育者を通して子どもの自然物に対する思い入れに触れることで、保護者は、その子の内面的な成長を知ったり、おとなとは異なる価値基準に気づいたりすることもあったはずである。このような、子どもの視点に立つよう促されること、つまり視点取得能力の要である視点の切り替え（渡部，2020）を促されることを通して、保護者は改めて子どもへの共感的な理解に立ち返る機会を得るのかもしれない。

保護者と同様に、地域住民も、各園の自然物・自然地とのかかわりを支える重要な存在であった。それぞれの園のある各地域には、園の保育の意図やねらいを理解し、私有地を提供することで、子どもや保育者が園外で安定して遊び学べる場所づくりに寄与する住民の姿を見ることができ。提供された遊び・活動のフィールドには山林、草地、田畑などで、これらは言わば、拡張された園庭であり、その中でも、田畑は、食育にもつながる栽培・収穫活動において重要な役割を果たしている。栽培活動は、それに伴う収穫活動と合わせて、緑被率の低い地域の保育園でも取り入れられており、東京都荒川区のような市街地の園における自然体験活動の大きな部分を占めるとされる（海老原・関本, 2017）。このたびの視察先となった6つの園においては、提供された田畑で“子ども自らが育てて採る”ことを実体験するにとどまらず、栽培・収穫技術の指導を通して地域住民と密接な交流も行われていた。保育者は技術指導を担う地域住民を「畑の先生」として子どもとともに頼りにし^{注23}、こういった地域住民との交流と子どもの学びの成果を、地域向けの園だよりにまとめて配信している。その地区の子どもを保育する施設として、地域住民とインタラクティブな関係づくりを試みてきた^{注24}と言える。

遊び・活動の支援において重視されること

以上のような、信州型自然保育の「普及型」に認定されている6つの公立保育園（長野県，2015）での実践をふりかえって、各園で、自然物を用いた遊びや自然地での活動の際に心掛けられてきたことをまとめたい。多くの園で指摘されたのは、安全対策の徹底はもちろん、それ以上に、遊びや活動の場が自然豊富な戸外か保育室内かを問わず、子どもの「気づき・興味・関心」「やりたいと思う気持ち」「楽しみたい気持ち」^{注25}の起こりを保育者が見とることであった。それらをふまえて、遊びや活動が計画されるならば子どもは意欲的に取り組める上に、保育者はその姿を通して子どもの「すごい」ところ、強み（strengths）を見出すきっかけを得られる。そういった文脈で自然物や自然地とかかわる遊び・活動を実施できれば、子どもは個別具体的な経験の積み重ねから、物事を一心に探求する心や生物に対する「愛着」および「責任感」^{注26}、その場を共にする仲間と協調的な人間関係を作る力^{注27}などを獲得していけるであろう。

う。

ただし、この流れをつくるには、まず遊びや活動に没頭できるだけの身体と心をつくれるように子どもの基本的生活習慣の獲得を促すこと^{注28}、日常的に自然物や自然地をクラスの話題として取り上げられること^{注29}、園外での遊び・活動では「地域の一員」として振る舞えるよう援助すること^{注30}、保育者自身が保育の中で「これやりたいというもの」を見つけて追及すること^{注31}、などが前提となるようであった。そして、複数の園の保育者が指摘したように、公営の保育施設として数年おきの人事異動を視野に入れ、各園が築いてきた自然資源を活用した保育を将来、赴任してくる職員へ引き継ぐ手立てを模索すること^{注32} もまた、実践に関わる重要な課題であると言えた。これまでに築いた保育をよりよいかたちで引き継いでいく方法を考えることは、すべての公営保育所に共通する課題である。とすれば、その園の保育の質を担保することでもある引き継ぎの手立てについては、今後、園の垣根を越えて議論され、また、保育者養成校や行政の担当者も参加するかたちで検討されることが望まれるのではないだろうか。

注

- 1 自然保育は、信州型自然保育認定制度実施要綱では、豊かな自然環境や地域資源を積極的に活用した様々な体験活動によって、子どもの感覚が豊かに刺激され、子どもの主体性、創造性、社会性、協調性等が育まれ、心身ともに健康的に成長することが目指すものとされる。
- 2 長野県で2015(平成27)年に創設された信州型自然保育の実施園として認定された施設は、2022(令和4)年10月現在で長野県内に270園である。
- 3 総務省統計局が整備し、独立行政法人統計センターが管理運営する「e-stat統計でみる日本」のウェブサイトで(<https://www.e-stat.go.jp/>)、「社会福祉施設等調査」の2021年の「【基本票】社会福祉施設等数，国一都道府県、施設の種類・経営主体の公営一私営別」のCSVファイルを参照。
- 4 ブセキは旧武石村で採集される鉱物で、上田市指定の天然記念物となっている。上田市マルチメディア情報センターが管理運営するウェブサイト「上田市の文化財」を参照。
<https://museum.umic.jp/bunkazai/> 最終閲覧2023年1月6日
- 5 長野県理化学会の宮坂晃の解説によれば、ブセキは「グリーンタフ中の黄鉄鉱が形を残したまま褐鉄鉱に変化したもの」で、「正6面体の結晶形」の鉱物である。長野県理化学会地学部会が管理運営するウェブサイト「長野県の地学」を参照
(<http://www2.ueda.ne.jp/~moa/>)。

- 6 伊那市の公立保育園は20園あり、そのうちの1園、伊那西部保育園が平成24(2012)年より休園中である。伊那市が管理運営するウェブサイトの「伊那市の保育園・幼稚園」のページを参照 (https://www.inacity.jp/kosodate_kyoiku/kidsplus1/174kids2.html)。
- 7 伊那市が管理運営するウェブページ「西箕輪南部保育園(信州やまほいく認定園)」を参照 (http://www.inacity.jp/shisetsu/hoikuen_kosodate/nishiminowanambu.html)。
- 8 上田市武石保育園の「3自然資源を活かした保育の実際1) 子どもと自然資源」における記述を参照。
- 9 上田市室賀保育園の「3自然資源を活かした保育の実際1) 子どもと自然資源」における記述を参照。
- 10 伊那市西箕輪保育園、伊那市西箕輪南部保育園の「3自然資源を活かした保育の実際1) 子どもと自然資源」における記述を参照。
- 11 上田市すがだいら保育園の「3自然資源を活かした保育の実際1) 子どもと自然資源」における記述を参照。
- 12 筑北村筑北ひまわり保育園、上田市室賀保育園の「3自然資源を活かした保育の実際1) 子どもと自然資源」における記述を参照。
- 13 伊那市西箕輪南部保育園の「3自然資源を活かした保育の実際1) 子どもと自然資源」における記述を参照。
- 14 伊那市西箕輪保育園の「3自然資源を活かした保育の実際2) 保育者と自然資源」における記述を参照。
- 15 伊那市西箕輪保育園の「3自然資源を活かした保育の実際2) 保育者と自然資源」における記述を参照。
- 16 上田市室賀保育園の「3自然資源を活かした保育の実際2) 保育者と自然資源」における記述を参照。
- 17 上田市武石保育園の「3自然資源を活かした保育の実際2) 保育者と自然資源」における記述を参照。
- 18 筑北村筑北ひまわり保育園、上田市武石保育園、伊那市西箕輪園の「3自然資源を活かした保育の実際2) 保育者と自然資源」における記述を参照。
- 19 上田市武石保育園の「3自然資源を活かした保育の実際2) 保育者と自然資源」における記述を参照。
- 20 筑北村筑北ひまわり保育園の「3自然資源を活かした保育の実際2) 保育者と自然資源」における記述を参照。
- 21 筑北村筑北ひまわり保育園の「3自然資源を活かした保育の実際3) 保護者・地域住民と自然資源」における記述を参照。

- 22 上田市すがだいら保育園の「3自然資源を活かした保育の実際3) 保護者・地域住民と自然資源」における記述を参照。
- 23 伊那市西箕輪保育園、伊那市西箕輪南部保育園の「3自然資源を活かした保育の実際3) 保護者・地域住民と自然資源」における記述を参照。
- 24 上田市武石保育園、伊那市西箕輪南部保育園の「3自然資源を活かした保育の実際3) 保護者・地域住民と自然資源」における記述を参照。
- 25 筑北村筑北ひまわり保育園、武石保育園、すがだいら保育園、西箕輪保育園の「3自然資源を活かした保育の実際4) 遊び・活動の支援において重視されること」における記述を参照。
- 26 上田市室賀保育園の「3自然資源を活かした保育の実際4) 遊び・活動の支援において重視されること」における記述を参照。
- 27 伊那市西箕輪南部保育園の「3自然資源を活かした保育の実際4) 遊び・活動の支援において重視されること」における記述を参照。
- 28 伊那市西箕輪保育園の「3自然資源を活かした保育の実際4) 遊び・活動の支援において重視されること」における記述を参照。
- 29 筑北村筑北ひまわり保育園の「3自然資源を活かした保育の実際1) 子どもと自然資源」、上田市室賀保育園の「3自然資源を活かした保育の実際4) 遊び・活動の支援において重視されること」における記述を参照。
- 30 上田市武石保育園の「3自然資源を活かした保育の実際4) 遊び・活動の支援において重視されること」における記述を参照。
- 31 伊那市西箕輪保育園の「3自然資源を活かした保育の実際4) 遊び・活動の支援において重視されること」における記述を参照。
- 32 上田市室賀保育園、上田市すがだいら保育園の「3自然資源を活かした保育の実際4) 遊び・活動の支援において重視されること」における記述を参照。

謝辞

この度の視察受け入れをご快諾くださった、筑北村立筑北ひまわり保育園、上田市武石保育園、上田市室賀保育園、上田市すがだいら保育園、伊那市立西箕輪保育園、伊那市立西箕輪南部保育園に関わる全ての方に心よりお礼申し上げます。また各園へ同行くださった上田女子短期大学事務局の小林亜樹子氏・花岡萌香氏、同短期大学幼児教育科の学生諸氏に深く感謝いたします。

文 献

- 茶屋智之. 2017. 自然環境と幼児理解の視座: 自然保育ポータルサイトの実践例の分析から. 帯広大谷短期大学地域連携推進センター紀要, 第4号, 21-32.
- 筑北村教育委員会. 2022. 筑北村幼児教育・保育推進プラン概要版: こどもがまんなか筑北村保育園. (筑北村教育委員会所在地: 長野県東筑摩郡筑北村坂井5687-2).
- 海老原麻美・関本仁. 2017. IV調査一対象・方法と調査結果の概要. 公益財団法人荒川区自治総合研究所. 自然体験の有効性と荒川区における取組の現状: 自然体験を通じた子どもの健全育成研究プロジェクト最終レポート, 29-51. 東京: 公益財団法人荒川区自治総合研究所.
- 原田美代子・山崎勝之・内田香奈子. 2021. 自然を活用した教育: 研究の課題と展望. 環境教育, 31. 74-84.
- 今井和子. 1990. 自我の育ちと探索活動ー3歳までのあそびと保育. 東京: ひとなる書房.
- 伊那市教育委員会. 2013. 子どもの育ちと学びを見つめて: 幼保小連携プログラム.
http://www.inacity.jp/kosodate_kyoiku/hoikuen_yochienhoka/hoikuen_shinai/hoikuennto_kusyoku.files/youhosyourenkei.pdf 最終閲覧2023年1月6日.
- 伊那市教育委員会. 2016. 保育理念.
http://www.inacity.jp/kosodate_kyoiku/hoikuen_yochienhoka/hoikuen_shinai/hoikuennto_kusyoku.files/H28hoikurinenn.pdf 最終閲覧2023年1月6日.
- Kaplan,R.,Kaplan,R.&Ryan,R.L.2009. 羽生和紀(監訳). 中田美綾・芝田征司・畑倫子(訳). 自然をデザインするー環境心理学からのアプローチ. 東京: 誠信書房. (Kaplan,R.,Kaplan,R. & Ryan,R.L.1998. *With People in Mind:Design And Management Of Everyday Nature*. English:Island Press)
- 宮里智恵. 2008. 児童の愛他的態度育成のための直接体験授業と間接体験授業の効果. 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部, 57. 43-50.
- 文部科学省. 2008. 1. 1. 体験活動の教育的意義. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/055/003.htm 最終閲覧2023年1月6日.
- 長野県. 2015. 信州型自然保育ガイド. 長野: 長野県県民文化部次世代サポート課.
- 長野県. 2022. 信州型自然保育認定園一覧(令和4年10月現在) 計270園.
https://www.pref.nagano.lg.jp/kodomo-katei/kyoiku/kodomo/shisaku/documents/2022_yamaoikuninteichiiran.pdf 最終閲覧2023年1月6日.
- 越中康治・杉村伸一郎. 2008. 保育者の自然観はいかにして形成されるのか? (1):「森の幼稚園」の保育者が語る現在の自然観. 幼年教育年報, 30. 49-59.
- 多田幸子・酒井真由子 (2022) 長野県における自然資源を活用した就学前の保育・幼児教育の実践事例に関する報告. 上田女子短期大学学術研究所所報, 第1号, 107-119.

富樫均. 2015. 第4章2節信州の自然の特徴. 長野県環境保全研究所自然環境部. 長野県環境保全研究所研究プロジェクト成果報告11: “自然史王国” 信州の歩き方～自然の歴史を生かすエコツアーへの誘い～(pp. 16-21). 長野: 長野県環境保全研究所.

上田市健康こども未来部子育て・子育て支援課. 2020a. 第2次上田市子ども・子育て支援事業計画. <https://www.city.ueda.nagano.jp/soshiki/kosodate-k/28629.html> 最終閲覧2023年1月6日.

上田市健康こども未来部子育て・子育て支援課. 2020b. 第3章計画の基本理念、基本目標. 上田市健康こども未来部子育て・子育て支援課(編). 上田市未来っ子かがやきプラン～第2次上田市子ども・子育て支援事業計画～(pp. 45-50). 上田: 上田市健康こども未来部子育て・子育て支援課.

渡部雅之. 2020. 視点取得研究の動向と学校心理学への寄与. 日本学校心理士会年報, 13. 13-23.

付 記

本報告は、堤裕美（上田女子短期大学）を代表とする令和3年度緑と水の森林ファンド公募事業「養成校と地域が連携した自然保育の人材育成・確保に向けた実証的研究～農山村地域における幼児期からの森林環境教育の推進に向けて～」の一環として行われた視察をもとに作成された。